

Karel Capek

先日、芦屋市立美術博物館で東欧の絵本大国「チェコ絵本をめぐる旅」展を見てきました。チェコの絵本は、レトロな色合いとイラスト、またデザインもとてもかわいく、長年にわたってとても人気の作品です。今月はそんなチェコの絵本の代表的な作家ともいえるカレル・チャペックの作品を2冊ご紹介します。

『ダーシェンカ Dasenka』
カレル・チャペック著 伴田良輔監訳
新潮社文庫 1998

大の犬好きだったカレル・チャペック（チェコの人には犬好きの人が多くみたい！）のおうちに、手のひらにかくれてしまうほどちっぽけな白いかたまりの子犬「ダーシェンカ」が生まれました。チャペックは、ダーシェンカにそれはもうべた惚れで、ダーシェンカを写真におさめてみたり（子犬をうまく撮影する方法も知っていますよ！）、ダーシェンカに話す物語をつくってみたり…。そんなチャペックのダーシェンカに対する愛情がたくさんつままるで家族アルバムのような1冊。また、おもしろいところが、今回作中に登場する挿絵をチャペックが描いているところ！普段、チャペックの作品の挿絵のほとんどは、画家であるチャペックの兄、ヨゼフ・チャペックが描いています。しかし、今回はチャペックがはじめて自分で描いた挿絵でした。兄のヨゼフの線を少しまねたどこかぎこちないイラストが、とてもかわいくチャペックのダーシェンカに対する愛情がここからも伝わってきますね。子犬のダーシェンカもかわいですが、そんなダーシェンカにメロメロなチャペックもとてもかわいらしいです。

「郵便屋さんの話」
（『長い長いお医者さんの話』カレル・チャペック著
中野好夫訳 岩波少年文庫 1952）

長い長いお医者さんの話からすてきな話をひとつ。あなたは、夜中に郵便局がしまったあと、あの中でどんなことがおこっているか知っていますか？郵便局で働くコルババさんはある夜、みてしまったのです。夜の郵便局にはちいさな妖精があらわれるのを。妖精たちはみんなであつまって、郵便局に集められた手紙でトランプをしていたのです。妖精たちは、手に持ただけで、その手紙がどんな手紙なのかを知る力をもっていました。ある日、郵便局に宛名も差出人もない1通の手紙が届きます。妖精たちの力で、その手紙の内容と、宛名、差出人を知った、コルババさんはその宛名の人に手紙を届けることに…。その配達にはなんと1年と1日もかかりました。その手紙の宛名は誰だったんでしょう？そしてその手紙はどんな手紙だったんでしょう？それは読んでからのおたのしみ。とってもドラマティックな展開が待っていますよ。この作品の挿絵は、さきほども紹介したチャペックの兄、ヨゼフが描いています。デザイン性溢れる滑らかな線で描かれたコルババさんも妖精もとってもかわいいですよ。

